—探究・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第13回

川崎市立木月小学校教諭　舩田　園子

衣手の　名木の川邊を春雨に
われ立ち濡るると　家思ふらむか

（巻第九　一六九六番歌）

電車がホームを去ってもなお進まない人の波は、改札口まで続いていた。「やはりそうだ。」出口では、午後からの雨に傘を持たない人達が、闇の中に細く流れていく雨を見つめて思案している。バスの列へ、タクシーへ、電話の列へ、クラクションが呼ぶ迎えの車へと、ひとり、また一人消えていく。

「春雨だから。」と独り言ちて歩き出した。細い雨は紺色の服に溶けて、やがて体ごと闇になり、雨になる。川辺にさしかかり、小さな橋を過ぎた。「あの人は今頃。」と思う。きっと濡れずに家にたどり着いただろう。雨はなおも降り続く。少し前なら、濡れながらひとり歩くこの景色は孤独の色に映る。けれど今、雨につけ思う人がいる。同じように濡れた自分を案じてくれるだろう人がいる。「恋しい」というのではなくて、その人を案じて、そして、遠くから「思って」いる。春の雨は、思いの上に静かに降ってくる。

この歌は、柿本人麻呂が名木川のほとりで、春の雨に遠く離れた家人を思って詠んだ歌である。「名木川のほとりで春雨に私が濡れていると、家の者たちは今頃思っているだろうか。」人麻呂の生涯はほとんど不明であるが、詠まれた歌から「妻」と呼ばれる女性がいたと言われている。中でも万葉集巻二の一三一の長歌は有名である。おそらく役人としての義務を果たすために、里に妻を残したまま都へと旅立ったときの歌であろう。

石見の海。人は何もないただの海というたとて、私には寄り添い、共寝した妻がいる。

その海に揺れる玉藻のように抱き合った妻がいる。もう山を越え、遠く離れてしまった。いとしい妻よ、その家の門をどうしても見たい。

靡け、この山。

同じ思いがもう一首の巻二の一三五番に詠まれている。やはり、山につけ、月につけ妻のことが思われ、「われこそは丈夫（猛く強い男）と誇っていたのに、衣の袖は涙で濡れ果ててしまった。」という歌である。簡単に抄訳してしまったが、実際の歌では、歌われた情景とともに、妻への愛が人麻呂のすべてであるかのように、祈りのように、叫びのように伝わってくる。旅と家と人麻呂。その生涯はわからないが、その思いは現代にもなお生き続けている。

人麻呂が名木川で作った歌は五首あり、この一六九六番からの三首は、いずれも名木川で雨に降られ、その春雨を家人の使いと思ったり、遠く離れた妻を思って詠まれている。

名木川の位置は不明だが、和名抄の山城国久世郡の郷名に那紀があり、現在の宇治市伊勢田町辺りがそれにあたる。川は栗隈溝をさすという説、木津川のもとの河道が巨椋池に注ぐ辺をいい、今の古川という説、また、千葉県勝浦市上野区名木の川とする説もある。歌碑は、宇治市伊勢田町の砂田児童公園内に立てられている。

川は懐かしさをもっている。旅先で出会う川。そこに人は故郷の川を重ねるのかも知れない。